

厚生労働省で働いてきた経験から

就職活動をしている皆さんの中には、就職するまでにどんなことをしておけばいいのか不安に思っている方が多いのではないのでしょうか。ここでは私が厚生労働省で働いてきた経験を元に、お話ししたいと思います。

<幅広い知識>

皆さんは数学や物理などの専門分野については十分な知識を持っていることと思いますが、その他の分野についてのめり込んでいることってあるでしょうか。社会人としてこういう知識が結構役に立つのです。数学や物理を専攻している方であれば、物事を論理的に考えてひとつひとつ詰めていくことができますが、仕事は学問のような論理だけではうまく進まない場合が多く、その結果、行き詰まってしまうことがあります。仕事の話では頭が固くなっているせいか、解決策が出てこないことがあります。こんな時は私の経験では、相手の好きそうな話題として例えばスポーツや時事関連ネタ、相手の出身地の出来事などを切り出すことで、お互いの緊張感をほぐし、柔軟な頭で考えることができるようになり、解決策が得られたことがありました。このように、仕事をしている時って、スムーズに話を進めるため、余計な無駄話が重要だったりします。

<いろんな経験>

皆さんはまだ若いので、今後の人生への投資という意味でも、いろんな経験をした方がいいと思います。思い返しますと、学生時代は、同じ研究室やクラブ活動の友人、アルバイト先の人たちといった限定された世界で生活していたような気がします。それ以外の世界にも広げていくことは、時には勇気がいるし、エネルギーも相当に使うことでしょう。でも、社会人になると、特に役所の場合は数年ごとに人事異動があります。当然仕事も変わりますので、異動後の環境は前の部署とは大きく異なり、ストレスを感じることもあります。若いうちからいろんな経験を通じて、新しい世界に入ることが苦ではない人は、仕事にも早く慣れるでしょう。私の経験では、仕事上最も大きな変化があったのは、フィリピンにある日本大使館に異動した時でした。人脈もなく、仕事は外務省のルールに従うということで、初めの頃は不安と緊張で仕事に手がつかない状態でした。何とかせねばとの思いから、趣味がゴルフだったこともあり、週末にゴルフをしている方の仲間に入れてもらうことを決意し、その方々との交流を通じて少しずつ人脈を築いていきました。この交流によって、仕事に役立つ情報が得られるようにな

り、仕事が大いにやりやすくなりました。新たな世界に飛び込んだおかげで異国の地でもなんとか対応できたのではないかと思います。

<コミュニケーション能力>

社会人になって、いろんな経験を積んでくるとコミュニケーション能力が必要だと改めて感じます。仕事とは、お互い意見が違っている相手とことん話し合い、作り上げていくものですが、コミュニケーション能力はその過程をスムーズにするための潤滑油のようなものだと思います。私が賃金課という最低賃金額を決める部署にいた時にそのことを痛感しました。最低賃金額は政労使の三者の話合いで決めていくのですが、労使間では考え方が全く異なるので最低賃金額の妥協点は容易には定まりません。行政側は相手の立場に立ち、妥協点を探っていくことになりませんが、そのときに、<幅広い知識>や<いろんな経験>もフル活用してコミュニケーションをとることがいかに大切で重要かということを学びました。

仕事は一人ではなく、チームプレイで行います。厚生労働省は、国民の生活に密着した仕事が多く、国民とのコミュニケーションが最も重要としている官庁のひとつと言えるでしょう。仲間と力を合わせて仕事ができ、その結果、社会に大いに貢献できる職場として、厚生労働省は魅力ある官庁ですよ！

職業安定局雇用政策課長補佐
角井 伸一



経歴

- 平成 6. 4 労働省入省（政策調査部統計調査第一課）
- 平成15.10 職業安定局雇用政策課中央雇用計画官
- 平成18. 3 在フィリピン日本国大使館一等書記官
- 平成21. 7 年金局企業年金国民年金基金課数理専門官
- 平成23. 4 現職

プレゼンが大事！

皆さんの中には、「数学」という学問分野が国家公務員という仕事とどのように結びつくのか、なかなかイメージが沸かない方も多いのではないのでしょうか。実は私も、学生時代は、自分の数学分野での能力がどう役立つのかははっきりしていない部分もありました。しかし私が今まで10年以上公務員として仕事をしてきた中ではっきりと言えることは、皆さんが大学などで学んできた成果は必ず公務員としての仕事の中で役立つということです。

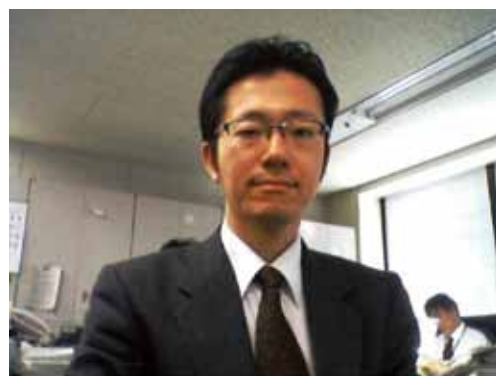
といっても、もちろん公務員としての仕事の中で、解析や代数を使う機会はありません。統計に関する知識を使うことはあるかもしれませんが。それよりも、私が今まで仕事をしてきた中で感じたのは、行政組織の中では、我々の数学の「知識」が求められているというよりも、むしろ、数学的・論理的な思考、そして冷静にデータを分析する能力が求められているということです。このような力は一朝一夕で身につくものではなく、（皆さんはあまり実感していないかもしれませんが）なかなか他の人が持っていない貴重な能力であることに気付かされることがしばしばあります。データに基づいた客観的な判断が多く求められている今、まさに数理職員が活躍する時代だと感じています。

さて私は今まで主に社会保障制度関係の仕事をしてきたのですが、社会保障関係では主に将来の社会保障の姿を見通す、つまり将来推計を行うことが数理職員の主な仕事となります。このような仕事をするに当たっては、もちろんどのように将来の姿を推計するかという技術的な難しさもあるのですが、それよりも難しいのは、得られた結果をいかに他の人にわかりやすく説明するかということです。もしこれが研究者などの立場であれば、論文などを論理的な飛躍なしに書き上げてしまえば基本的にはそれで説明になりますが、公務員としての仕事の中では、数学の知識もない、また社会保障制度などの背景をあまり知らない人に対しても、得られた結果をわかりやすく説明する必要があります。これが意外と難しく、未だに

四苦八苦することが少なくありません。しかし逆に相手に自分の説明したいことがすっきり伝わった時には、非常にうれしく感じることも事実です。我々、数理職員は研究者でもあり、また発信者でもあります。そういう意味では表舞台に立つこともしばしばありますから、仕事にやりがいもあります。

ちなみに、私は厚生労働省に入省した後に、長期の行政官在外研究員制度を利用して、2年間、カナダの大学院に留学をしていました。海外留学の他にも様々な研修などもあり、厚生労働省での仕事は、日々勉強の連続でもあります。仕事の中で知識を蓄積していき、それをまた仕事に生かしていくというのは非常に楽しいことでもあります。これからますます数理職員は行政の中で大きな役割を担っていくことは間違いのないと思いますので、是非皆さんチャレンジしてみてくださいはいかがでしょうか？

政策統括官付社会保障担当参事官室長補佐
鈴木 健二



経歴

- 平成10.4 厚生省入省（年金局数理課数理調整管理室）
- 平成16.4 保険局調査課数理第一係長
- 平成17.7 カナダ、ヨーク大学留学
- 平成19.7 年金局数理課長補佐
- 平成23.7 現職

数理的な素養を活かす仕事があります！

厚生労働省に採用されて7年余りが経ち、改めて振り返ってみると、いろいろな経験をしてきたなど感じています。ここではそんな経験の一端をご紹介しますことで、採用後、皆さんがどういった業務に取り組んでいくことになるのかイメージする一助になれば、と思います。

私は、入省してまず、保険局調査課に配属されました。当時の私は、社会人になったばかりで右も左も分からない状態だった上に、医療保険に関する知識はほとんどなく、病院に行くと窓口で3割支払う、というくらいのことしか知りませんでした。そんな中、周りの先輩方にご指導をいただきながら、一つ一つの業務に取り組んでいきました。ここでは、医療保険に関する財政試算や統計資料の取りまとめ等を担当していました。3年目の平成18年には、医療保険制度の大きな改正があり、今でも印象が深く残っている時期です。当時は、国会での審議にあたって、医療費の将来の見通しや制度改正の効果といった数字の面がクローズアップされたので、とても慌ただしい毎日でした。単に、計算した結果を示すだけではなく、どうしてそのような結果になるのか、それがどういうことを意味するのかをきちんと分かりやすく説明することが大事なことなのだ実感しました。

その後、一度、厚生労働省を離れて、国民年金基金連合会へ出向しました。国民年金基金とは、自営業の方等（正確には、国民年金の第1号被保険者）を対象にした制度で、国民年金に上乗せした給付が受けられるものです。ここでは、そうした年金に関する経理の予算や決算を取りまとめるということを担当していました。企業会計と同様に複式簿記によって決算書は作成されるので、簿記の考え方や伝票の起こし方といった知識が必要になりました。在任中、予算書や決算書の作成方法を見直すことになり、関係者への説明に四苦八苦するということもありました。また、連合会では積立金の運用を行っているのですが、ちょうどこの頃、経済情勢が厳しくなったこともあり、加入員の方々から資産運用に関するご照会も多数ありました。ここでも、どのような考え方に基づいてどういった資産運用をしているのか、加入員の方々へ納得してもらえるように説明しなければな

りません。

そして、厚生労働省に戻ってきて、年金局数理課に配属となりました。公的年金では、少なくとも5年に一度、財政検証ということを実施することになっていて、数理課の最も大事な業務です。現在、税・社会保障一体改革の中で年金制度の改革議論も進められていて、いろいろな検討がなされています。

これまでの業務を振り返って感じることは、やはりしっかりと説明ができることの大切さです。筋道を立てて納得してもらえる説明をしていくというのは、数学を学ぶことで培ってきた論理的な思考能力が求められる場面ではないかと思えます。

厚生労働省では、皆さんが持っている数理的な素養を活かすことのできる仕事がたくさんあり、数理職に求められる役割は、これからもますます大きくなっていきます。一方で、数学以外の知識が求められることもありますので、幅広い分野に関心を持つことも重要だと思います。

最後になりますが、このパンフレットを手にした方が、厚生労働省の数理職に興味を持ち、訪問してくれることをお待ちしております。

年金局数理課数理専門官
矢崎 和彦



経歴

- 平成16.4 厚生労働省入省（保険局調査課）
- 平成19.7 国民年金基金連合会数理部数理課数理係長
- 平成23.7 現職

入省から6年目までを振り返って

私が入省してからの仕事や経験についてお話ししたいと思います。

①入省～年金局数理課数理第2係へ配属

平成18年4月に入省後、まずは省内研修があり、5月初めに年金局数理課に配属されました。その後、他省庁の仲間とともに人事院による研修を終え、実際に業務がスタートしたのは6月下旬でした。

年金局数理課は課員のほとんどが数理職員で、厚生年金・国民年金財政について、実績統計を基に将来推計を行っています。

ここでの新人職員の仕事は、年金関係基礎データの整備と、年金財政に関する問合せへの対応です。

当時、実感したのは文書作成の大変さ。ある日、係長から、年金のデータを管理するシステムについて、説明文書の作成指示がありました。文書案を作って係長に渡したところ、しばらくして「宮崎くん。」と声が。何だろう、と思って行くと、そこには赤ペンの修正の嵐で真っ赤になった紙が…。落ち込みましたが、修正されたものは、誰が読んでもわかりやすいものになっていました。自分の案では、専門的な用語を説明せずに使っていたり、主語が省かれすぎていたりして、他人にはわかりにくいものだったのです。

数理課時代の最大の仕事は「平成21年財政検証」です。年金財政の将来100年間の推計を行うもので、特に緊張感を持って業務に当たりました。基礎データの相互チェックや修正、試算結果の確認などで深夜まで働くことも多く、大変だったものの、新聞報道されるなど社会的関心も高く、公表された際には達成感もひとしおでした。

②勤労者生活課最低賃金係長へ異動～現在

平成21年4月に労働基準局勤労者生活課へと初めての異動。係長となり、はじめて部下を持つことになりました。これからは、自分の仕事だけやればよい訳ではなく、係としての仕事の管理や部下の指導も行わなければなりません。

数理課との最大の違いは、数理職員が私しかないこと。数理課では、係長～課長補佐～課長がそれぞれ数字を確認してくれていましたが、これからは、作った数字の最終責任は自分にあります。大変ですが、その分やりがいも感じられません。

ここでの仕事は最低賃金の改定です。最低賃金は、企業は、従業員に対し、最低賃金額以上の賃

金を支払わなければならないという制度です。近年の大幅な引上げによる企業への影響の分析など新たな課題もあり、いろいろと自分で考えて仕事ができるのが楽しいです。

また、周りには法律職、労働基準行政職、労働基準監督官などいろいろな職員がおり、法律の知識や、現場での法律の運用など、それぞれが持つ知識や経験を活かして最低賃金制度の企画・立案に当たっているため、様々な観点からの考え方を聞くことが出来て、大変勉強になっています。

③数理課、勤労者生活課の2つの課を経験して

環境も役職も異動ごとに変化し、周りから期待されることも異なってきますが、それに対応していくことで成長出来るため、2～3年サイクルで異動できる仕組みは大変有意義だと思っています。

④就職活動をしている皆さんへ

就職活動をしている皆さんにお伝えしたいことは、まずは話を聞いてみてほしいということ。これは、他省庁や民間企業でも同じです。HPやパンフレットだけでは伝わらないことがたくさんありますし、話を聞いたら興味が湧いてきた、なんてことも多々ありますので、まずは自分の可能性を狭めることなく、幅広く就職活動を行ってください。その上で、厚生労働省を選んでくだされば幸甚です。

労働基準局労働条件政策課賃金時間室 最低賃金係長
宮崎 雄介



経歴

平成18.4 厚生労働省入省（年金局数理課）

平成21.4 現職